

論題 中世哲学における神秘思想
——教父とその遺産——

司会 泉 治 典

提題：教父における神秘

九州大学 谷 隆一郎

提題：ディオニシオス・アレオパギテスの
神秘思想 中央大学 熊田陽一郎

提題：ヘシュカスムにおける神化の思想

——パラマスを中心として

南山短期大学 大森正樹

(於 聖心女子大学 1992. 11. 15)

司 会

泉 治 典

今世紀の中世哲学研究の三つのトピックスとして、第一に教父学の発達、第二に伝統的なトミズムに代わる新しいトマス解釈、第三に神秘主義の研究をあげることができであろう。

ところでわが国では、神秘主義は早くもケーベルによって紹介されて強い関心を喚び、教會的制約なしに、これを哲学の根本動機に据えた人が少なくなかった。晩年の内村鑑三が共感したという事実もある。哲学界では当初はドイツ観念論の源として知る程度だったかもしれないが、やがて西田幾多郎や西谷啓治において日本独自の哲学的思索を深化させ、かつこれに実存的性格を付与する働きをもつものとなった。今日では研究者の層が厚く、多数の翻訳と研究を生んでいることは、世界的に見ても驚嘆すべきことではないかと思う。

神秘主義についてのシンポジウムは数年継続して行われ、これまでのシンポジウムと同様、中世初期から後期への展開が捕捉されるであろう。また若い世代も加わって、新しい問題提起がなされるであろう。その際望まれることは、神秘主義の研究が、近代哲学の構築した世界像の崩壊や弁証法的思惟の喪失などに消極的に動機づけられる

ことに終わらないで、積極的にこれを生かして行くことであろう。

神秘主義は中世において非常に大きな内容と働きをもつ思想へと成長した。その中には、正統と異端の対立を超える第三の立場、世界概念の拡大、女性論、民衆運動などが含まれるので、こうした事柄についての歴史研究を軽視してはならないと思う。つまり歴史を媒介してとらえることは神秘主義の本質理解を弱めることにはならず、むしろその逆でありうると、わたくしは考えている。神秘主義か神秘思想かという名称問題は、この視角からも取り上げうると思う。

今回の三人の提題は、ニュッサのグレゴリオス（4世紀後半）、ディオニシオス・アレオパギテース（5世紀末?）、バラマスのグレゴリオス（14世紀前半）をそれぞれ中心におくものであった。ディオニシオスは西方世界に多大の影響を与えたので、次回への橋渡しとなろう。以下、提題と討議について、ごく手短かに報告する。

神秘主義(思想)は、神への超越が同時に精神の自己構成となり、神の自己否定が同時に神の自己贈与と呼ばれるような思惟の活動現場をもっている(谷氏)。これは「神の現存」と「神に(おける)現存」との一致でもある(熊田氏)。バラマスにおいては、神はヒポスタシスであると同時にヒポスタシスでないと言われた(大森氏)。神秘家はこの「存在論的ダイナミズム」(谷氏)をたずさえて語り行動したのである。以上について質疑は二つの方向からなされた。一つはケノーシス、プロアイシシについて、さらに根源者を名づけることの否定について問うもので、神秘主義の根本動機を明らかにしようとするものである。今一つは演繹的あるいは帰納的論証からして神秘主義にどう接近しうるかという問いであり、一般者の地平から絶対者へ、下から上へ、多から一への道を、いわばレトロスペクティブに問うものであった。

討論が活発で賑やかだったことを司会者は喜んだが、あとから考えるとまだ端緒だったかもしれない(受肉論との関係やディオニシオスの最終問題は取り上げられなかった)。もちろん回を重ねることで深まると期待されるが、その際好むと好まないとに拘らず、神秘主義は現代の哲学にとって無用となったとは言えないことを考えておく必要がある。例えばソシュールの差異概念や、メルロ＝ポンティのプレザンスの思想などは、オンとメー・オンについての根本的思惟を再度もったのであるが、中世の神秘主義はそのための導き手たることを失わないであろう。これは、歴史の同一性的反復はありえないとした上で、なおかつ言えることである。